現代倫理道徳研究会発表要旨（平成 30 年 2 月 21 日）

「感謝研究の必要性 ―近年の感謝研究から―」

廣池千九郎研究室
主任研究員　宮下和大

「感謝」という言葉は、日常的に用いられる言葉であり、モラロジーにおける「伝統」や「報恩」といった言葉とも密接に関わり合うものである。そこで、「伝統」や「報恩」などの言葉をもって伝えようとしている内実を、「感謝」という日常語とその概念を軸にして再考察していくことが、広く共に語り合うことのできる地平を開いていくのではないかという期待がある。これは「忠」や「孝」という東アジア的な概念を現代的に再考察する上でも何か新たな知見が得られるのではないかという期待でもある。

1990 年代以降のポジティブ心理学の興隆のなか、心理学では感謝研究が推進されつつあることは、望月文明「感謝と幸福感――近年のポジティブ心理学の研究から」『モラロジー研究』68 号（2011）が報告してきた通りである。なかでも、エモンズとマクロフ【Emmons, R. A., & McCullough, M. E. (2003). Counting Blessings versus Burdens: An experimental investigation of gratitude and subjective well-being in daily life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84 (2), 377-389】の調査報告は感謝研究の画期的研究でもあった。

本発表は、望月（2011）の報告を出発点にして、その後に進展してきた近年の感謝研究を振り返りながら、発表者が今後進めていきたいと考えている「東アジアにおける感謝の比較文化研究」の大まかな構想を提示し、その意義、必要性、研究の実現可能性、研究方法などについて意見・提案を頂戴する場として発表させていただいた。

エモンズとマクロフ（2003）は「感謝日記」あるいは「感謝事筆記法」とも称される方法を用いて、感謝を数え上げることが well-being（主観的幸福感）を高めるという結果を示したものだが、同内容を追試した日本での実験【相川充・矢田さゆり・吉野優香（2013）「感謝を数えることが主観的ウェルビーイングにおよぼす効果についての介入実験」『東京学芸大学紀要』64】では同様の結果が得られなかった。それはなぜかという問いから、日本人にとっての感謝感情には負債感情「ほかの人から自分が利益を得ていると認知することによって生じる、他者の行為に報いようとする義務的感情」【Tsang, J. A. (2006). The effects of helper intention on gratitude and indebtedness. Motivation and Emotion, 30, 198-204.】が伴っているという文化的差異が着目されてきており、「ありがたさ」に含まれる「申し訳なさ」が、こと現代日本人の主観的幸福感をめぐって問題となっているということが浮き彫りにされている。

同様の傾向性が韓国やタイなどアジア圏の国々でも示されたという報告もあり、感謝研究の領域ではその理由としてアジア圏における仏教や儒教の影響が挙げられつつある。こうした心理学における研究を承けて、東アジアの精神文化史に照らしながら、従来の忠や孝の議論とは様相を異にした「感謝研究」が思想史研究として可能かどうかを今後検討してみたいというのが本発表の提示する構想である。心理学の分野で蓄積されつつある感謝についての様々な概念分析を活用した東アジアにおける比較文化研究ということになる。